



ピエール・ボエスチュオー研究（４） 『ケリドニ
ウス・チグリヌスの物語』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鍛治, 義弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006027

ピエール・ボエスチュオー研究

(4) 『ケリドニウス・チグリヌスの物語』

鍛 治 義 弘

1556年ピエール・ボエスチュオーは初めて書物を上梓した。そのタイトルは次のようである。

L'HISTOIRE / DE CHELIDO- / NIVS TIGVRINVS, SVR / L'INSTITVTION DES PRIN- / ces Chrestiens & origine des Royaumes, / Traduyt de latin en François, par Pier- / re Bouaistuau, natif de Bretagne des / parties de Nantes, Auec vn trai- / té de paix & de guerre, & vn / autre de l'excellence & di- / gnité de mariage. / Ensemble vne autre hystoire de la faulse religion de Ma- / hommet, & par quel moyen il a seduyt tant de peuple, / lesquelz sont de l'inuention du translateur. / Auec priuilege du Roy. / A PARIS. / Pour Vincent Sertenas Libraire, tenant sa bouti- / que au Palays en la gallerie par ou lon va à la / Chancellerie, & en la rue neufue nostre / Dame à l'enseigne S. Ian l'Euangliste. / 1556.¹⁾

「キリスト教君主の教育と王国の起源に関するケリドニウス・チグリヌスの物語 ブルターニュ、ナント地域生まれピエール・ボエスチュオーによる翻訳 戦争と平和の論と結婚の卓越と尊厳に関するもう一つの論付き あわせてマホメットの偽の宗教、この者が如何に多くの人々を誘惑したかのもう一つの物語 これらは翻訳者の創案になる

パリ 尚書院に向う裁判所の回廊とヌーヴ・ノートルダム通りに福音史家ヨハネの看板の店を構えし書籍商ヴァンサン・セルトナのために 1556年」

タイトル・ページの裏面にセルトナ宛て1556年8月5日付けの特認の写しが印刷され、末尾には1556年8月8日刷了との記載もあるので²⁾、この書籍は1556年8月の内には世に出たと思われる。この書は、他のボエスチュオーの書物同様、好評を博したようで、16世紀のうちに、幾度も再版され³⁾、またボエスチュオーはイングランドに渡った折1560年1月1日にタイトルを*Institutin du Royaume chrestien*に変更して女王エリザベスに献呈し⁴⁾、英語訳も刊行された⁵⁾。

¹⁾ アウグスブルク州立市立図書館Augustsburg, Staats-und Stadtbibliothek蔵 バイエルン州立図書館Bayerische Staatsbibliothekミュンヘンデジタル化センターMünchner Digitalisierungs Zentrum デジタル図書館Digitale Bibliothek上で公開されている電子テキストによる。

²⁾ f. 211 v°<< Fin de l'institution des Princes / Chrestiens, acheué d'imprimer / le huitiesme iour d'Aoust. / 1556>>、

³⁾ 1559、1564、1565、1567、1570、1572、1576、1578、1579、1585年の版が報告されている。詳細はBoaistuau, *Le Théâtre du Monde*, Droz, 1981, pp.234-235でのシモナン註; Pettegree, Walsby, Wilkinson (edited by), *French Vernacular Books Books published in the French Language before 1601*, Brill, 2007, Vol. I, p.171, Vol.I, p.390を参照のこと。

⁴⁾ Pierre Boaistuau, *Histoires prodigieuses*, Introduction par Stephen Bamforth et annoté par Jean Céard, Introduction, p.37. この版はCambridge, library of Emmanuel College, S16. 4. 8として所蔵されている。この女王エリザベスへの献辞を持ち、美しい装飾頭文字、装飾罫で飾られ、豪華な装丁の書については、同序文の38-42頁を参照のこと。

⁵⁾ *A most excellent hystorie, of the institution and firste biginning of Christian princes, and the originall of*

『ケリドニウス・チグリヌスの物語』には近代批評版がまだなく、研究はこれらの諸版の比較検討から始めなければならないが、私たちはとりあえずが初版と1559年版⁶⁾との比較を行なうことにしよう。

まずは内容項目を見てみよう。1556年版の内容項目は次のように構成されている。

タイトル	ã i r°
特認の写し	ã i v°
ヌヴェール公フランソワ・ド・クレヴへの献呈の書簡	ã ii r°
読者への序文	ã ii v°
ボエスチュオーの読者へのラテン語のエピグラム	ē i v°
ボエスチュオーの読者へのギリシア語のエピグラム	ē i v°
ジャン・ド・ラ・ランドのボエスチュオーへのオード	ē ii r°
ボエスチュオーの読者へのソネ	ē iii r°
フランソワ・ダンブランのソネ	ē iii r°
ピエール・トレドアンソネ	ē iii v°
O.ド・ボールガールのソネ	ē iii r°
目次	ē iii v°e
翻訳者の序文	f. l r° ⁷⁾
第1章	f. 13 v°
第2章	f. 22 v°
第3章	f. 32 r°
第4章	f. 41 r°
第5章	f. 48 v°
第6章	f. 58 v°

kingdomes: wherunto is annexed a treatise of peace and warre, and another of the dignity of marriage, englished by James Chillester, London, H. Bynneman, 1571.

⁶⁾ 1557年版が*Bibliothèque d'Antoine du Verdier*, Lyon, Barthelmy Honora, 1585, p.983で指摘されているが、存在は確認されていない。使用する1559年版は以下のとおり。

L'HISTOIRE / DE CHELIDONIVS / TIGVRINVS SVR

L'INSTI- / tution des Princes Chrestiens, & origine / des Royaumes, traduitede Latin en Fran- / çois, Par Pierre Boaistuau, surnommé / Launay, natif de Bretagne. / Dediée à Monsieur de S. Sidroine, M. Nico- / las Breton, Secretaire de Monseigneur / l'Ilustrissime Cardinal de Lorraine. / A PARIS. / Pour Vincent Sertenas, demourant en la rue neuue nostre Dame, / à l'enseigne S. Ian l'Euangeliste: Et en sa boutique au Palais, / en la gallerie par ou lon va à la Chancellerie. / 1559. / AVEC PRIVILEGE.

f.143 v° に<<ACHEVE D'IMPRIMER / le Samedy dixhuictiesme iour de / Nouembre, mil cinq cens / cinquante neuf. >>とある。アルスナル図書館蔵でフランス国立図書館gallica上で公開されている電子テキストによる。

⁷⁾ これより前の部分は折丁付けのみであったが、これ以後は紙葉付けも行なわれるので、紙葉付けで記す。

第7章	f. 86 v°
第8章	f. 106 r°
第9章	f. 131 r°
第10章	f. 145 v°
第11章 ⁸⁾	f. 151 r°
第12章	f. 160 r°
第13章	f. 188 v°
刷了	f. 211 v°

本文については後に検討するとして、まずは巻頭部分の変化を見よう。先に註に挙げた引用に示されるように、1559年版のタイトルでは、三つのボエスチュオー創案になるという論への言及がなく、サン・シドロワヌ大修道院長でロレーヌ枢機卿秘書のニコラ・ブルトン殿への献呈と記載されている。これと対応して1556年版のヌヴェール公への献呈の書簡は1559年版にはなく、新たにブルトン殿への献呈の書簡①⁹⁾に置き換えられた。この間の事情について、Richard A. Carrは、マルグリット・ド・ナヴァールの後に『エプタメロン』となる作品を1558年にボエスチュオーが『幸福な恋人たち』の題で出版したことによる騒動のため、フランソワ・ド・クレヴの寵を失い、新たな庇護者を求めたため、と説明する¹⁰⁾。また読者への序文、ギリシア語のエピグラム、ピエール・トレドアンソネ、ド・ボーグラールのソネが1559年版では削除されている。その代わりにB・ド・ジラルのソネ②がブルトン殿の献呈の書簡の次に置かれ、1556年版でボエスチュオーのソネとされたものがラ・ランドのソネ③として続く。フランソワ・ダンブランのソネ④がその次に来て、ジャン・プロエ・ド・トゥルノンのソネ⑤がその後に新たに付け加えられる。1556年版でのラ・ランドのオード⑦は残されるが、目次⑥の後に回され、ボエスチュオーのラテン語のエピグラム⑧が続き、正誤表⑨と読者への前書き⑩が新たに付加される。翻訳者の序文⑪は全体的には維持されているが、準備中だという貴族の起源と古さについて言及していた末尾12行は削除された。

本文には第7章に大きな付加が二箇所あり、これは後に検討する。まずは両版における語句レベルでの修正を見ておこう。両版には非常に多くの相違があり、これらをすべて指摘することは不可能であるから、訂正と変更に分けて、ごく特徴的な点に限ることにする。

明らかに誤っているものの修正を訂正とすれば、まずは文法的誤りの訂正が挙げられよう。1556年版は初版ということもあるのだろうか、こうした誤りが、ことに初めの方の頁で頻出する。名詞、形容詞などの複数形のsは<<il ont fait>> (1556:f.11 v°)などのように表記されていない例が多く見られるが、1559年版では<<ilz ont fait>> (1559:ã viii r°)などのように訂正される

⁸⁾ 目次に示された内容と異なっている。目次では全12章となっているが、本文では第10章で目次のない正義が扱われ、目次の第11章良君暴君の区別は本文の第12章に対応し、以後目次の章番号は一つずつずれて本文の章番号に対応している。1559年版も同様である。

⁹⁾ 参照の便のため丸付き数字で1559年版での順序を示す。

¹⁰⁾ Pierre Boaistuau, *Histoires tragiques*, édition critique publiée par Richard A. Carr, Honoré Champion, 1977, Introduction p.XXXIX.

ことが大半である。動詞の活用形は比較的誤りが少ないが、<<ilz ayant>> (1556:f.41 r°)が<<ilz ayent>>(1559:f.20 r°)と訂正されるような場合も散見する。代名詞の形なども、時に<<ce donner quelques aproches>> (1556:f.50 v°)から<<se donner quelque approches>>(1559:f.27 r°)と正しく直される。名詞の性は一六世紀と現用で異なることもあるが、<<le vipere>> (1556:f.11 r°)は<<la vipere>> (1559:ã vii v°)と訂正された。全体として1559年版で多くの誤りが訂正されているが、訂正されない場合や、上記の<<quelque approches>>のように1559年版で新たに誤る場合もある。

アクセント記号、句読記号の訂正として、まず a に付されるアクサン・グラーヴについて指摘しておかなくてはなるまい。1556年版はavoirの直説法現在 3 人称単数形にはほぼ一貫してアクサン・グラーヴをつけており、1559年版は多くの場合でこれを除いている。<<à eulx, la ne pareillement penser>>(1556:f.11 v°)から<<à ceux là, ne pareillement penser>> (1559:ãviii r°)の場合は、語句の訂正に加えて、ヴィルギュルの位置の訂正、アクセント記号の付加によって、意味の通る文になっている。<<comment sera il bon aux autres, ce dit le Sage.>>(1556:f.43 r°)が<<comment sera il bon aux autres ? ce dit le Sage.>>(1559:f.21 v°)となる場合は、より適切な疑問符の使用により文意の把握がより容易になるし、<<entre les autres : incommoditez>>(1556:f.56 r°-v°)と<<entre les autres incommoditez>>(1559:f.31 v°)、<<aux sciences merueilleuse deuotion>>(1556:f.67 v°)と<<aux sciences : merueilleuses deuotions>>(1559:f.39 r°)では、ドゥー・ポワンの有無で、文意が変わってしまうだろう。

先にも述べたように、1556年版には多くの誤りが含まれているが、なかでも次のような誤植は、訂正がなければ、文意の把握が困難になるか、あるいは非常に異なった意味になっただろう。主だったものを挙げれば以下のようになる。

<<de telle sorre>>(1556:f.15 v°) <<de telle sorte,>>(1559:f.2 v°)

<<n'astre>>(1556:f.16 r°) <<naistre>>(1559:f.3 r°)

<<nour n'a riture>>(1556:f.18 r°) <<nourriture,>>(1559:f.4 v°)

<<d'emergie>>(1556:f.46 v°) <<d'energie>>(1556:f.24 r°)

<<esprit>>(1556:f.66 v°) <<escrit>>(1559:f.38 v°)

<<poisson>>(1556:f.94 v°) <<poison>>(1559:f.62 v°)

<<Voilà ce? luy qui seul n'ay>>(1556:f.108 r°) <<Voilà celuy qui seul ay nay>>(1559:f.72 r°)

<<& conseil ou autorité de iuge>>(1556:f.200 r°) <<sans conseil ou autorité de iuge>>(1559:f.135 v°)

明らかな誤りとは言えないが修正される場合を変更とすれば、最も多く見られるのは、綴り字の変更である。これについて1556年にボエスチュオーは、印刷工に任すとの言葉を発していた¹¹⁾。そして1559年には、印刷工が代わったからか、あるいは自身が校正した結果か、非常に

¹¹⁾ << Au reste quant à l'ortographie ie la laisse à la discretion de l'Imprimeur : pource que ie sçay qu'elle est aujourd'huy si variable & incertaine, qu'il a presque autant de sortes d'ortographie, que de liures ; (1556 a viii r°) 「その上書法については私は印刷工の裁量に委ねる。書法は今日非常に変化に富み不確定で、本と同じだけの種類の書法があるのを知っているから。」

沢山の語のつづり字が変化している。例としてつぎのようなものがある。

adnoncer (f.7 r°)/ annoncer (ãv r°), aguillon (f.17 r°)/aiguillon (f.3 v°), auint (f.17 v°)/aduiet (f.4 r°), consumer (f.23 r°)/consommer (f.7 v°), defferé (f.31 v°)/differé (f.13 v°), respec (f.31 v°)/respect (f.13 v°), viel(f.32 r°)/vieil (f.14 r°) (前者が1556年版、後者が1559年版)

上記のような対応からすると、1559年版で現用と同じものになる傾向が見られるようにも思われるが、auertir (f.51 r°)/aduertir (f.27 v°)、orfelins(f.132 v°)/orphenins(f.89 v°)、auteur(f.146 r°)/aucteur(f.98 v°), condamné(f.196 v°)/condemné(f.133 r°)などの対応を考慮すると、むしろラテン語源に基づき変更する意図があると考えられる¹²⁾。しかし1559年版でもつづり字は一貫しておらず、変更された形と変更されない形が混在しているのは、他の一六世紀の印刷物にも頻繁に見られることである。

『ケリドニウス』のテキストでは語順の変更はほぼないが、<<Qui à perpetué la memoire, iusque à nostre siecle de Iosias,>>(1556:f.101 v°)から<<Qui a perpetué la memoire de Iosias iusqu'à nostre siecle>> (1559:f.67 r°)への変更は、<<de Iosias>>の係り具合が明確となり、文意の把握が容易になり、ボエスチュオーが示す配慮の珍しい例である。

語句の変更もかなり頻繁に観察されるが、訂正と異なり、文意や文体に微妙に関わることも考えられるので、個別の検討が必要であろう。ここでは三つの例をあげるに留める。

<<femme prodigue>>(1556:f.205 v°)から<<femme pudique>> (1559:f.139 v°)への変更は、これ自体で考えれば、どちらも文意がとれないことはない。しかしこれがペトラルカの言としての<<il est bien difficile que le mary lascif ayt sa femme prodigue [pudique]; comme au contraire le chaste impudique>>「好色な夫が浪費家の〔慎重深い〕妻を持つことは困難で、反対に貞潔な夫が淫蕩な妻を持つのが困難であるのと同様だ」という文の中にあるとなると、1559年版の方が対比としても正しいと思われるが、1556年版も決定的に誤りとするには至らないだろう。

ボエスチュオーが<<sugillateurs>>(1556:f.10 v°)を<<detracteurs>>(1559:f.ã vii v°)に変更したのは、ラテン語<<suggillo侮辱する>>に基づくと思われる1556年版の、当時としても稀な語を、読者の理解を考慮して、よりフランス語らしい言葉に代えたものと考えられる。しかしボエスチュオーは、ラテン語<<expugnator 攻略者>>を模倣したと思われる<<expugateur>> (1556:f.44 r°)などの、いまだフランス語としてなじんでいなかった言葉を幾つも残しており、こうしたラテン語風用語が「翻訳」に相応しい文体と感じていた可能性も排除できないだろう。こうした点は先ほどのつづり字の変更と共に文体論的に精査される必要がある。

最後にボエスチュオーの書きぶりが窺われる興味深い場合を挙げよう。

<<Les montz Pyrenées diuisent l'Italie d'avec l'Espagne>> (1556:f.183 r°)は<<Les montz Pyrenées diuisent la France d'avec l'Espagne>> (1559:f.123 v°)に変更されている。勿論後者が正しいのだが、フランス人であるボエスチュオーがどうしてこのような初歩的誤りを犯したのか。それは

¹²⁾ それぞれの古典ラテン語、教会ラテン語advertere, orphanus,auctor,condemnareに語源を持ち、annoncer, advenir, differer,respect もそれぞれ古典ラテン語、annuntiare, advenire, differe, respectusが語源である。

この前後の文がエラスムスの『平和の訴え』 *Querela pacis*を引き写しているからだ。現在刊行中の『エラスムス全集』によれば、このボエスチュオーの文に対応するのは<<Pyrenei montes Hisapnos ab Gallis seiungunt, >>であるが、その註はバーゼル1517年発刊のフローベンによる初版では<<ab Italis>>であり、ルーヴァン [1518] 年のマルテンス版で上記のように変更されたことを指摘している¹³⁾。つまりボエスチュオーは初版に従い「ピネレー山脈はイタリアとスペインを分つ」と書いたが、自身で誤りに気付いたか、エラスムスの訂正版に従うかして、『ケリドニウス』の文も訂正しているのである。こうしてはしなくも典拠が明らかになる。

以上検討したように、全体として1559年版の方が優れており、今後近代版を編纂する際は1559年版を底本とすべきであるが、つづり字の問題など1559年版ですべてが解決される訳ではないので、1556年版も参照した上で、細かな配慮が必要であろう。

次に内容の変更を検討しよう。1559年版には第7章中のマホメット論に二箇所大きな加筆がある。第一の加筆では、先の話は短すぎたのでこの主題について筆の動きをひろげ、理由なく語ると思われないように (f.56 r°)、としてマホメットに関する論述の典拠に言及する。そしてアエネアス・シルウィウスやピエール・ブロンなどの名を挙げるが、具体的作品名は記されない。さらに、こうして証言を書くのは、一つには、自分の提示するものが、他の人の書いたものの要約であるからで、もう一つにはコーランを読みたいとの好奇心を消すためであるからだ、と注意する (f.56 v°)。

第二の加筆は次の文で始まる。

<<Les Turcs escriuent au liure dessus allegué nommé Asear, que Mahomet, aagé de quatre ans, alloit pescher avec les autres petits garçons. Et ainsi qu'il estoit seul en vn champ, l'ange Gabriel vestu d'ornemens blancs comme neige, vint à luy en figure d'homme, lequel le print par la main, & le tira apart, & luy ouurit la poitrine avec vn rasouer trenchent, luy tira le cueur, dont il osta vne goutte noire en laquelle les Turcs dient que les diables tentent les hommes, & que c'est chose commune à tout homme d'en auoir. Et qu'après l'ange luy remist le cueur en son lieu, & luy netoya la poitrine, a fin qu'il ne peut iamais estre tenté du diable en aucune saison. Voila la premiere fable, que le liure Asear a escrit en ce qui concerne le commencement de Mahomet.>>¹⁴⁾ (1559:f.58 r°)

この文は実は次のブロンの文をほとんど引き写したものである。

¹³⁾ *Opera omnia Desideri Erasmi Roterodami, Ordines quarti Tomus secundus*, North-Holland Publishing Company, 1977, p.92, p.93.

¹⁴⁾ 「トルコ人は前掲のアセアルと言う名の書で、マホメットは、四歳の時、他の子供たちと釣りに行っていたと書く。そして独りで原にいと、天使ガブリエルが雪のように白い服をまとい人間の姿をしてやって来て、マホメットの手を取り、脇に引いて行き、鋭利な剃刀で胸を切り開き、心臓を取り出し、そこから黒い滴を取り去った。それで悪魔は人間を試し、それを持っているのはどの人間にも共通なのだ」とトルコ人は言う。そして天使は心臓をもとの場所に戻した後、胸をきれいにしたが、それは如何なる時にも悪魔に試みられないためだった。これがマホメットの始まりに関してアセアルの書が書いた最初の作り話である。」

<<Aussi dit que quand auoit quatre ans, qu'il alloit pescher avec d'autres garçons : & luy estant seulet en vn champ, l'ange Gabriel vestu d'ornements blancs comme neige, vint à luy en figure humaine, qui le print par la main, le tirant à part, & l'ayant mené derriere vne colline, luy ouurit la poitrine d'un raouer trenchant, & luy tira le cœur, dont il osta vne goutte noire, en laquelle les Turcs dient que les diables tentent les hommes, & que c'est chose commune à tout homme d'en auoir : & qu'apres l'ange luy remit le cœur en son lieu, & luy nettoya la poitrine, afin qu'il ne peust iamais plus estre tenté du diable en aucune saison. Voila la narration que le liure d'Asear a escrite touchant le premier commencement de Mahomet.>>¹⁵⁾

そしてブロンから借用は1559年の加筆部分に限られたわけではなく、1556年版からすでに見られる。次の文を見よう。

<<Les Turcs ont vn liure qu'ilz nomment Asear, auquel est contenu toute la vie de Mahomet, & mesmes tous ses gestes depuis sa naissance iusques à sa mort. Son pere auoit nom Abdola, & sa mere Imina, son pere mourut auant que sa mere l'eust produit sur terre. Sa mere mourut deux ans apres qu'elle eut enfanté, & par ainsi il demeura destitué de pere & de mere, mais si elle eust auorté de son fruit, elle eust beaucoup fait pour toute la republique chretienne.>>¹⁶⁾ (1556:f.92 v°)

この文は次のブロンの文に近似している。

<<Les Turcs ont vn liure nommé Asear, qui contient toute la vie de Mahomet, lequel ils tiennent & obseruent comme nous les euangiles. Il est comprins leans tout ce qu'il feit depuis sa naissance iusques à sa mort, & que son pere auoit nom Abdola Motalip, & sa mere Imina, tous deux idolastres. Il escript que ledict Abdola, mourut auant que Mahomet nasquist : & sa mere Imina mourut deux ans apres qu'elle l'eut enfanté : & par ce poinct demeura orphelin de pere & de mere.>>¹⁷⁾ (前掲書 f.170 r°)

構文に幾分かの相違は見られるものの、内容はほぼ同じである。ただしブロンは、トルコ人がアセアルを遵守するのを、キリスト教徒の福音書に対する態度に比し、マホメットの父の姓名を挙げ、父母が偶像崇拝者であったと指摘している。またボエスチュオーは、マホメットがいなければ大いにキリスト教国のためになっただろう、と最初からトルコ人に攻撃的な言辞を加えてもいる。

¹⁵⁾ Pierre Belon, *LES OBSERVATIONS DE PLVSIEVRS SINGVLARITEZ ET choses memorables, trouuées en Grece, Asie, Iudée, Egypte, Arabie, & autres pays estranges, redigées en trois liures Par Pierre Belon du Mans*, Gilles Corrozet, 1553, f.170 r°-v°. Getty Research Institute所蔵の書籍に基づき同館のオンライン上で公開されている電子版による。

¹⁶⁾ 「トルコ人はアセアルと名づける書を持っており、そこにマホメットの全生涯、生誕から死亡までの全事跡も含まれている。父はアブドラと言う名で、母はイミナという名であった。父は母がマホメットをこの世に産み落とす前に死んだ。母は出産後二年で死に、こうして父母を奪われていた。しかし母が子供を流産していたら、キリスト教徒の国全体に大きなことをなしていたであろうに。」

¹⁷⁾ 「トルコ人はアセアルと名づける書を持っており、そこにマホメットの全生涯を含んでいて、私たちが福音書にするようにまもり遵守している。そこには生誕から死亡までのなしたことが、父はアブドラ・モタリブと言う名で、母はイミナと言う名で、二人とも偶像崇拝者であったことが含まれている。このアブドラはマホメットが生まれる前に死に、母親は出産後二年で死亡したと書かれている。そしてこの点によって父母を亡くした孤児であった。」

こうしてマホメット論のかかなりの部分をピエール・ブロン（18）の論から借用しているのだが、その借用の様相を検討する前に、この博物学者とその著述の経緯を、『観察』の近代版の序文により、ごく簡潔に説明しておこう。1517年にル・マン近くで生まれたピエール・ブロンは、薬種商の使用人を経て、ドイツ、ヴィッテンベルグ大学のヴァレリウス・コルディウスの下で植物学などを学び、1542年帰仏後はフランソワ・トゥルノン枢機卿に仕えていた。フランソワ一世は神聖ローマ皇帝カール五世に対抗するため、東地中海一帯に勢力を拡大させていたスレイマン治下のオスマントルコと結び、1535年には駐在大使をコンスタンチノーブルに置くまでになっていた。1546年末にはガブリエル・ダラモンの使節が派遣されるが、ピエール・ブロンはトゥルノン枢機卿の意向によりこの使節に同行する。ブロンは海路でエーゲ海の島を巡った後、コンスタンチノーブルに到着し、エジプト、パレスチナに旅し、さらにスレイマンのペルシア遠征にも途中まで同行し、帰国する。

帰国後1551年に『海の不思議な魚の博物誌』を出版した後、旅のノートを集めて『ギリシア、アジア、ユダヤ、エジプト、アラビア、その他の奇妙な国で見出された幾つもの奇妙な事物と記憶されるべき事柄の観察』として1553年に出版する。

この『観察』は三書からなり、第一書は動植物が、第二書は旅行した地域の様子が、そして第三書でトルコ人の生活が記述されており、ボエスチュオーが借用しているのは第三書の第1章から第9章までのイスラム教を扱った部分からである。

この借用について検討するために、ブロンの書をもとに、すでに引用した箇所も含めて、借用箇所を一覧にしてまず示そう。

<i>Chelidonium</i> 1556年版	<i>Chelidonium</i> 1559年版	<i>Belon Observations</i> 1553年版
f.92 v°-f.93 r°	f.57 r°-v°	f.170 r° マホメット伝記 父母 家系
f.93 r°-v°	f.57 v°-f.58 r°	f.170 v° マホメット15歳で商旅行 38歳で砂漠での孤独な生活
	f.58 r°	f.170 r°-v° マホメット4歳ガブリエルの出現 最初の試し
	f.58 r°-v°	f.170 v° マホメットがコーランを書こうと思ったとき、預言者であるとガブリエルが告げる
	f.58 v°-f.60 r°	f.174 r°-f.175 v° 天国への旅 神の与えた五つのもの
f.95 r°	f.63 r°	f.171 v° コーランは詩篇の集成
f.95 r°	f.63 r°	f.171 v°-f.172 r° トルコ人のコーラン崇拜 コーランは儀式、マホメットがトルコ人に与えた法を収める コーランは新旧約聖書から内容を採り取る
f.95 r°-v°	f.63 r°	f.172 r° コーランの認めるイエスの三つのすばらしさ

¹⁸⁾ Pierre Belon, *Voyage au Levant (1553), Les Observations de Pierre Belon du Mans*, texte établi et présenté par Aleandra Merle, Chandeigne, 2001. <<Introduction>>, pp.7-42.

f.95 v°-f.96 r°	f.63 r°-v°	f.172 r° コーランは、イエスが人の心を知り、死者を甦らせ、不治の病を治した、と書く
f.95 v°-f.96 r°	f.63 v°	f.175 v° コーランのいう地獄
f.96 r°-v°	f.63 v°-f.64 r°	f.176 v°-f.177 r° コーランの教える天国

この表から読み取れるように、ボエスチュオーは、大きく二つの部分で連続してブロンから引き写しているが、ブロン論の順序には従っていない。1559年版では、最初の部分で新たなブロンからの引用が付け加えられているが、加筆は引用だけではなく、f.60 r°の末尾からf.61 v°末にかけて、ブロンにはよらない、マホメットの支離滅裂虚偽な話を例証するものも含んでいる。その後1556年版からの、鳩を用いた不正な手段とマホメットを異端に結びつける論の後に、もう一連のブロンからの文章が来る。

それではボエスチュオーはブロン論をどのように引いているのか検討しよう。先に二つの引用をしたが、後者のようなブロン文の内容を変更することはあまりない。マホメットが砂漠で孤独な生活を送るようになったのを30歳(1556:f.92 v°)としているが、これはサベリウスに従いマホメットが西暦632年34歳で毒殺された(1556:f.98 r°)としているために、合わせたのであろう。勿論語句や構文が幾分変更されることは間々生じている。

引用でむしろ目に付くのはブロン文からの削除である。ことにマホメットが真夜中ガブリエルの訪問を受けて天国へと旅立つ逸話はブロン文から多くが削られた。ブロンでは、ガブリエルの訪問を受けて、二人はまずエルサレムに向かうが、その途中に二人の女の声聞くもののマホメットは応えなかった、エルサレムについてガブリエルが、これらの声に応えていたら、トルコ人はユダヤ教徒かキリスト教徒になっただろうと語る、部分がある。ボエスチュオーはこの声の逸話をすべて省略した。またガブリエルとともに訪れる第一天から第七天までの描写では、ブロンはそれぞれの天をかなり精しく描き出し、そこに住むアダムなどのキリスト教の人物、天使の様子とその働き、銀その他のその天を構成する貴金属などに言及するが、ボエスチュオーは住む人物と貴金属だけを述べ、話を素早く展開する。ボエスチュオーにとっては、この天国を巡る話を提示すれば十分で、教義的な解釈を呼び起こす可能性のある細部は問題とならないのであろう。またコーランの教える天国を述べる部分では、天国に行ったトルコ人に、美味な食べ物が金銀の容器で供され、小姓が持ってくる金の皿から着飾った神女フル（フーリー）が飛び出してきて、トルコ人を抱きしめるという主筋は、ブロンをなぞってなされているが、坐る絨毯の色や材質、給仕する小姓の身につけているものの細かな描写、フルと抱き合って五〇年後に神の述べる言葉などは省略されている。

ブロン『観察』は第三書の第1章から第9章がマホメットの教えを語っているが、ボエスチュオーが借りたのは、第1章、第2章、第3章、第7章、第9章の一部であり、イスラムの宗派やスンナに関する第4章、死者を問い質す二人の黒い天使に関する第5章、最後の審判に関する第6章、マホメットが女奴隷と交わることを許したと語る第8章からは、何も引いていない。また第2章のヘジュラや第3章のコーランの成立事情などトルコ人の宗教を理解する上

では重要な項目にもまったく触れていない。

こうして特定の章から、しかも長い描写を省略して引用するのは、より興味深い箇所だけに絞り、読み手の関心を逸らさないという配慮にもよるのであろうが、何よりボエスチュオーがブロンの記事をマホメット批判の例として使用するからである。ブロンはこうした部分を書く目的を、イスラム教徒の生き方の説明するためとしており¹⁹⁾、確かに、マホメットに批判的な言辞も散見するものの²⁰⁾、記述は概ね伝聞したとおりに行なっていると思われる。ボエスチュオーは既に第7章の章題で<<la faulce doctrine de Mahomet>>(1556:f.86 v°)「マホメットの偽りの教義」と言及し、上に引いた引用ではマホメットが生まれなければよかったと、より批判の度を強めており、さらには次のようにまで言う。

<<Voila comme cest esprit sanguinaire, & ce meurtrier veult faire d'vn Dieu de clemence & de misericorde, vn tirant & bourreau, & croy que le plus grand miracle qu'il ait iamais faict, c'est d'auoir transformé tant de creatures raisonnables en bestes.>>(1559:f.61 v°)²¹⁾

ボエスチュオーは、ブロンを引いて、コーランも認めるキリスト教の優れた点を確認すると同時に、マホメットの天国訪問やトルコ人の天国での逸楽の姿などの、マホメットの教えの奇矯な愚かしさを強調するように思われる。そしてさらにブロンにはよらない、人を魔法にかけるかのようにして虚偽を信じさせるマホメットのやり方を挙げて、イスラム教を攻撃している。つまりブロンからの引用もこうした反イスラム論の例として利用している。

ボエスチュオーの反イスラム論で興味深いのは、次の文に見られる点である。

<< il nye la trinité avec les Sabelliens, avec les Macedoniens, il nye que le saint Esprit soit Dieu, avec les Nicolaites il approuue la pluralité des femmes, avec les Cerdoniens il dit n'estre possible que Dieu ait vn filz, pource qu'il n'a point de femme, avec les Manichéens il nye que Iesus Christ ayt esté crucifié, avec les Donatistes, il nie que les sacremens de l'église, depuis la passion de Iesus Christ ayant quelque efficace. Avec les Origenistes, il di que les diables seront saueez : avec les Antropomorphites, il met la derniere felicité en voluptez. >>²²⁾ (1556:f.95 r°)

¹⁹⁾ << il m'a semblé bon mettre vn petit discours de Mahomet à part, (tel que personne n'a encore mis en nostre langue,) auant que d'en escrire aucune chose, afin qu'il me soit plus facile que par cy apres ie puisse faire entendre la raison pourquoy les Mahometistes se maintiennent en telle maniere de viure. >. (op.cit., f.170 r°) 「マホメット教徒がこのような生き方で身を持っている理由を後で理解させるよりより容易であるために、それについて何かを書く前に、(だれもまだ私たちの言語に訳していない) マホメットの小論を別に置く方がよいと思われた。」

²⁰⁾ <<le faulx prophete Mahomet>>(f.169 v°) 「偽り言者マホメット」; <<plaisant voyage>>(f.174 r°) 「馬鹿げた旅」; <<Toutes ces choses susdictes escriuit Mahomet en son Alcoran, qui monstrent le peu d'entendement qu'il auoit.>>(f.175 v°) 「上記の事柄をすべてマホメットはコーランに書いたが、それはマホメットにあまり知力がなかったことを示す」; <<mille follies que Mahomet leur a faict entendre>>(f.176 v°) 「マホメットが彼らに言い聞かせた数々の愚かなこと」

²¹⁾ 「以上がこの血まみれのやつ、この人殺しが、寛容と慈悲の神を暴君、死刑執行人にしようとするやり方だ、そしてこいつがかつてなした最大の奇蹟は多くの理性的被造物を野獣に変えたことだと思う。」

²²⁾ 「マホメットはサベリウス派とともに三位一体を否定する。マケドニウス派とともに聖霊が神であることを否定する。ニコライ派とともに一夫多妻を認める。ケルドン派とともに、妻がいないのだから、神が息子を持つことはあり得ないと言う。マニ派とともにイエス・キリストが十字架に架けられたこと

マホメットの教えを、名だたるキリスト教異端説と同化し、イスラムを異端として告発しているのである。こうしたイスラム教を異端化してその誤りを指摘するのは何もボエスチュオーが初めてではない。例えばスペインの枢機卿フワン・デ・トルケマダ Juan de Torquemada (1388-1468) は1459年に執筆し、1476/1480年にブリュッセルで初版されたという *Tractatus contra principales errores perfidi Machometi et Turcorum sive Sarracenorum* 『不実なマホメットとトルコ人あるいはサラセン人の主要な誤りへの反論』で同様な言及をしていた。即ちマホメットの犯す41の誤りのうち、第一の誤りは異端サベリウスのような三位一体の否定であり、第三の誤りは異端アリウス、ネストリウスのような聖霊が神であることの否定であり、第二〇の誤りはオリゲネスのような悪魔は救われるべきであるという説である、と記述している。さらに第二七の誤りは一夫多妻の容認で、第三二の誤りは将来の至福を肉の喜びに置いたことであるとする²³⁾。ボエスチュオーの挙げた八つの異端説のうち、三つが異端者名も一致し、二つは異端説の内容が同じと思われる、この書は少なくとも1511年と1512年にフランスでも出版されており²⁴⁾、ボエスチュオーがこの書のこの箇所を典拠としている可能性もあろう。ともかくボエスチュオーはマホメットの教えを異端として痛烈に批判している。

ボエスチュオーのマホメット論の検討の最後として、『ケリドニウス』第7章との関係を考察しよう。ボエスチュオー自身が翻訳と謳い、H. Tudorが明らかにしているように²⁵⁾、この作品はジョス・クリクトーヴ Josse Clichtove の *De regis officio opusculum* 『王の務めについての小品』に多くの部分を負っている。『ケリドニウス』の第7章はクリクトーヴの作品の第7章に対応し、「王は神の礼拝に熱心であらねばならない、自らの名誉を熱愛しなければならない、教会の自由を守護しなければならない」と題されたこの章は、次のような構成になっている²⁶⁾。神の信仰と礼拝を王の義務であるとした後、神を尊重する王は栄え、神を軽視する王は追放されることをソロモン、ダヴィデ、ヨシュアなどを例として述べる。さらにピネハスのように、神を侮るものを罰するべきであると説き、罰する神の例をポンペイウス、ヘロデ、ネロなどに対する場合として挙げる。最後にテオドシウス帝が大殺戮を引き起こし、聖アンブロシウスから破門されたが、悔恨の結果許されたという逸話を、王が司祭に従う例として述べる。この展開のなかで、神を侮るものを罰するべきとする主張は次のように述べられていた。

を否定する。ドナトゥス派とともに、教会の秘跡が、イエス・キリストの受難以降、何らかの効力を持ったことを否定する。[この文章は原文のままでは意味が通らないので、ayantをaientの誤植と解釈する] オリゲネス派とともに悪魔が救われるだろうと言う。神人同形論者とともに最期の至福を悦楽に置く。]

²³⁾ Ioannis de Tvrrcrem Cardinalis S. Sixti : *Contra Principales errores perfidi Machometi*, Roma, Gulielmo Facciotti, 1606 (ローマ国立図書館蔵 Internet Archiveで公開されている電子テキスト) により、言及した箇所を指摘すれば、それぞれ順に、p.51sq, p.69sq, p.161sq, 194sq, p.199sqである。

²⁴⁾ Andrew Pettegree, Malcom Walsby, *Books published in France before 1601 in Latin and Languages other than French*, Brill, 2012, Vol II, p.1592

²⁵⁾ H. Tudor, << L'Institution des princes chrestiens : A note on Boaistuau and Clichtove >> in *B.H.R.*, Tome XV, 1983, pp.103-106.

²⁶⁾ Josse Clichtove, *De regis officio opusculum*, Paris, Henri Estienne, 1519, f.25 r°-f.29 r° (オーストリア国立国立図書館蔵、Google上で公開されている電子テキストによる)。

<<Si igitur tremenda dei contemnitur maiestas ore blasphemio linguaue maledica si dei nomen tota die blasphematur inter regni incolas: nonne zelo dei moueri debet rex generosus vt alter Phinees & puginone seuerae punitionis animaduertere in abominabiles illos deieratores ? >>²⁷⁾

「それゆえ、口で冒瀆し舌で罵り、恐ろしい神の威厳を侮り、神の名が日々王国の住民の間で冒瀆されるなら、気高い王は、もう一人のピネハスであるかのように、神への熱愛に動かされて、その忌まわしい誓言者に短刀で厳格な罰を加えるべきでないのか？」

「民数記」25、7－8でピネハスはモアブの神々を拝むイスラエル人とモアブ人の娘の二人をやりで突き殺しており、ここで問題とされているのは古代の異教、偶像崇拜に対する罰である。

ボエスチュオーはクリクトーヴの論を受けて自著の第7章を構成するが、多くの例を付加しており、少なくとも忠実な翻訳とは言えない。しかし論の展開は同じように行なわれる。神への敬虔が君主の務めであると説き起こし、神を恐れるものが栄え、偶像崇拜者、宗教を軽視するものが根絶やしにされることをソロモン、ダヴィデなどを例として示す。続いて冒瀆者を厳罰に処すべきことが扱われるが、ダリウスと聖ルイの場合が挙げられ、異端者を追放すべきことが次のように述べられる。

<< C'est à dire qu'ilz doiuent employer leur principale estude, & s'euertuer à toute extremité de nettoyer leurs Royaumes de loups rauissans, faux prophetes, seducteurs, faulx docteurs, hypocrites, heretiques qui voulans estre sages en leurs yeux, & prudens en eux mesmes, sont deuenuz folz & remplis de tenebres, aueugles, & conducteurs des aueugles qui resistent au saint esprit, & à la verité, & sont donnez en sens reprouvé : car Sathan, comme recite saint Paul, le Prince de ce monde leur tient les yeux bandez, & leurs espritz esclaves, en sorte qu'ayant les yeux ouuers ilz ne voyent point, & en oyant ilz n'oyent point, celà procede de la rage furieuse du diable qui s'esleue contre Dieu & les ministres de sa parolle. >> (1559, f. 55 r°-v° : 1556年版も同様だが、句読法の優れた1559年版による)

「即ち君主たちは自分たちの主な大きな注意を用い、精一杯努力して、自分の王国から、誘惑する狼、偽預言者、誘惑者、偽博士、偽善者、異端を一掃すべきである。この者たちは君主たちの目に賢明で、自分たち自身で用心深くあらうとしながら、気が狂い、聖霊と真理に反抗する暗愚な人、盲人、盲人を導く者に満たされ、神に見放された方向に委ねられている。というのも、サタン、聖パウロの語るように、現世のこの君主は、この者たちの目を隠し、精神を捕え、その結果目が開いていても見えず、聞いてても聞こえず、これは神とその言葉の代行者に反抗して立ち上がる悪魔の激怒に発するからだ。」

こうして先のクリクトーヴから処罰の対象が拡大され、対象の位相が異なることになる。その後キリストの誕生からコンスタンティヌス帝までの迫害の歴史が述べられ、コンスタンティヌス帝後のアリウス派、ペラギウス派など異端が名指された後、上記で検討したマホメット論が挿入される。この論の後は再びクリクトーヴの論の展開に戻り、神の怒りとその正当な復讐が

²⁷⁾ *Ibid.*, f. 26 r°

ポンペイウス、ヘロデ、ネロなどを例として語られ、テオドシウス帝と聖アンブロシウスの逸話で章を閉じる。

こうして両者を比べて見ると、ボエスチュオーは大筋でクリクトーヴの構成に従いながら、君主が懲罰すべき対象を偶像崇拝者から異端に拡大し、モハメット論はこの異端懲罰の個別論となっていることが見て取れる。ブロンなどから具体例を多く引いたために、論の構成の量的配分としてはいささかバランスを欠いていると思われるが、そこにこそクリクトーヴと異なるボエスチュオーの独自性がある。さらにボエスチュオーはマホメット論からクリクトーヴの論に戻る際に次のような興味深い見解を述べる。

<<Toatilla Roy des Gotz estant interrogué pourquoy il estoit si cruel & inhumain enuers les hommes ; il respondit avec grande assurance :Que pensez vous que ie soye sinon que l'ire, & le fleau de Dieu, enuoyé sur terre, comme instrument, pour chastier les pechez du peuple ? Nous cognoissons par celà, que Dieu nous chastie le plus souuent par les meschans, lesquelz ne laissent pour celà d'estre meschans, & dignes de punition, pource que selon la parole du Seigneur, il est necessaire qu'il vienne scandalle : mais maleheur sur celuy par qui il viendra>>(1559:f.65 v°)

「ゴート族の王アッチラはなぜ人間に対してあれほど残酷で非人間的なのかと尋ねられて、大いに確信して答えた。俺様が、人々の罪を懲罰するための道具として地上に送られた神の怒り、災厄に他ならないというのをお前たちは何と思うか。これにより私たちは、神が私たちを大抵悪人によって罰され、その悪人はそのために悪人であり罰に値せずにはおかない。神の言により、必然的に躓きのもととなるものは来るが、それをもたらす者には不幸が来るからである。」

暴君による災厄も人の罪が招いた神の懲罰と見なす見解である。こうした見解は戦争やそれに伴う飢饉などを同様な神の懲罰と見なす、『世界劇場』での見解につながるものであろう。

ここまで、『ケリドニウス』第7章に挿入されたマホメット論では、大きな加筆も含めて、ブロンの『観察』から多くの文が借用され、これらの文は異端としてのマホメット批判の例を提供していることを確認し、このマホメット論をクリクトーヴの論の構成に従っているこの章との関係で検討した。この検討の結果が明らかにするのは、「編纂者」*compilateur*としてのボエスチュオーの「再利用」*recyclage*の手法である。紙幅の関係で今回は扱えないが、クリクトーヴの論は「君主の鑑」という伝統的ジャンルに属している。ボエスチュオーはこうした伝統的ジャンルに発想を仰ぎ、先行作品の構成を借り、そこに変更を加え、古典古代、そしてとりわけ同時代の作品から例を多く付け加え、例示による説得を試みる作品を作り上げる。この手法は『世界劇場』や『人間の優越と尊厳に関する小論』などのボエスチュオーの後の作品でも見られるものだが、すでに処女作で実行されていた。今回は第7章のみの分析に限定せざるを得なかったが、作品全体でのこの手法の具体的検討は稿を改めて行なわれねばなるまい。

Étude de Pierre Boaistuau

(4) *l'Histoire de Chelidonus Tigurinus, sur l'Institution des Princes chrestiens et origine des Royaumes*

Yoshihiro KAJI

En 1556 Pierre Boaistuau a publié sa première œuvre intitulée *l'Histoire de Chelidonus Tigurinus, sur l'Institution des Princes chrestiens et origine des Royaumes*, qui n'a pas encore d'édition moderne. Nous commençons notre recherche sur cet ouvrage par la collation des deux impressions, version de 1556 et celle de 1559. Dans la publication de 1559 nous trouvons les deux grands ajouts dans l'«<hystoire de la faulce religion de Mahomet>>» insérée au chapitre VII. Boaistuau emprunte beaucoup de passages de cette partie au tiers livre des *Observations de plusieurs singularitez et choses memorables* de Pierre Belon, parues en 1553. L'analyse de la manière de cette «<citation>>» révèle un procédé de «<recyclage>» par ce «<compilateur>>».